

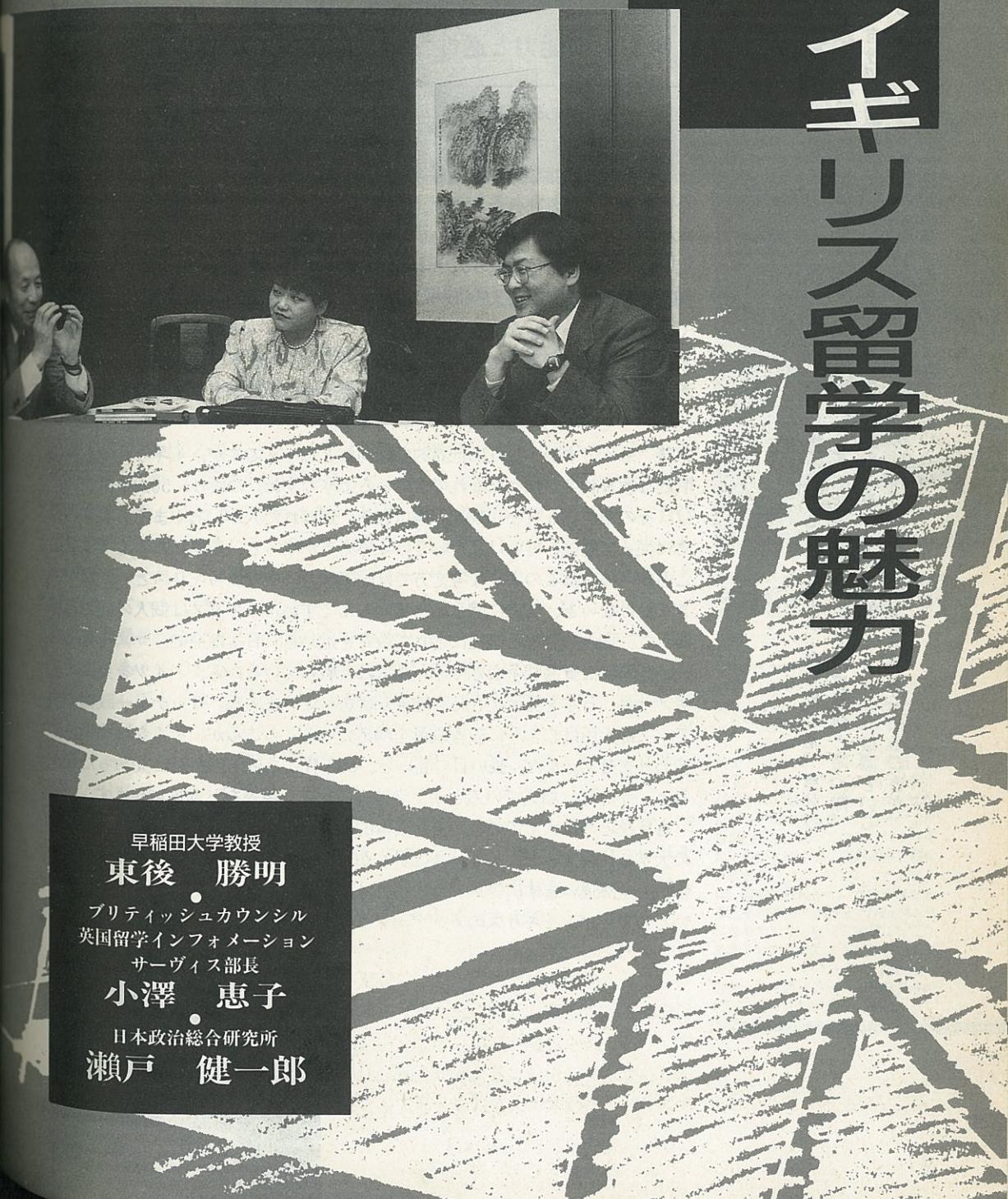
## CONTENTS

キャビタスが選んだ信頼できる語学学校——日本版

**Learning English in Britain**

The Gabbitas Truman &amp; Thrift Guide to English Language Schools and Summer Courses

|                                    |                              |   |
|------------------------------------|------------------------------|---|
| はじめに                               | <i>John Murrell</i>          | 120                                       |
| ガイドの利用法                            |                              | 121                                       |
| 目的にあったコースを選択するためにギャビタスがお手伝いします     | <i>John Trevis</i>           | 123                                       |
| イギリスの私立カレッジで学ぶ                     |                              | 125                                       |
| ケンブリッジ大学英語検定試験                     | <i>W.G. Shepherd</i>         | 133                                       |
| オックスフォード大学英語検定試験                   | <i>James Pailing</i>         | 136                                       |
| 日英間の転校問題                           | <i>Richard Pearce</i>        | 139                                       |
| SECTION ONE 公立カレッジの英語コース 143       |                              |   |
| BASCELT Colleges                   |                              |   |
| 公立カレッジの英語教育                        | <i>Fleur d'Antal</i>         | 144                                       |
| SECTION TWO 大学の英語コース 149           |                              |   |
| Universities & University Colleges |                              |   |
| 大学の英語コースで学ぶメリット                    | <i>Dr.J.S. Munro</i>         | 150                                       |
| SECTION THREE ARELS-FELCOスクール 156  |                              |   |
| ARELS-FELCO Schools                |                              |   |
| ARELS-FELCOで英語を学ぶ                  | <i>Mavis Mayo</i>            | 157                                       |
| SECTION FOUR 私立の語学学校 190           |                              |   |
| Independent Schools                |                              |   |
| 外国人の英語教師のためのコース                    | <i>Dr.Terence J.Gerigthy</i> | 191                                       |
| SECTION FIVE エグゼクティブコース 207        |                              |   |
| Executive English Schools          |                              |   |
| SECTION SIX サマーコース 209             |                              |   |
| Summer Schools & Activity Holidays |                              |   |
| 省略記号の解説                            | 214                          | THE FACTFINDER Cross Reference Charts 217 |
| 試験の種類                              | 216                          | Counties and Regions of Britain 219       |



# イギリス留学の真価とは何だろう。

数年前、オックスフォードの大学院留学から帰国された浩宮さまは、「自分で考え、自分の意志で決定する」習慣を身につけられたことが、イギリスで学んだ最大の成果だと語った。自分で問題点をみつけだし、自分で考え方、方針を決める。簡単なようで、じつは難しいことだ。イギリスの大学教育の中心をしていているのは、この独創性。自分をよく知ることが、自分らしい人生を歩む道標となってくれるに違いない。

## ○個人の能力と適性を重んじる英国の高等教育

小澤 イギリスの教育制度は、小学校から大学まで、他の国と比べるとあまりにも違いすぎるんです。内部から見ても複雑なので、ましてや外国から見ると、とてもなく複雑なんですね。そこが、外国からイギリスの学校に編入する場合にネックになる部分なんです。スムーズに移行できない。イギリスでは、日本やアメリカ、フランスの学校が、大学の教養課程でするような勉強を、大学に行くまでにやってしまうんですね。それがまずひとつ。それから、イギリス国内で大学に進学する人が、パーセンテージでいえば全体の9パーセントにくかいかないかという程度なんです。

東後 そんなに増えたんですか。昔は3~4パーセントと聞きましたが。

瀬戸 現在では、ポリテクニックのような、学位が取得できる機関を含めると、約20パーセントの学生が進学していますよ。

東後 そうですか。これは世界的な傾向だと思うんですが、イギリスでも、旧制的な教育制度が徐々に崩れてきているようですね。つまり、50人子供がいれば、その中から5人なり10人が選ばれる。選ばれた人が、あくまでも自分の意志に従って勉強していくべきいいという考え方はずっと、基本にあるんです。ところが、彼らはこのような考え方では国際社会の中で、イギリスという国が生きていけないと、切実に感じ始めているんですね。イギリスは個人の能力を重視して、個人の意志と適性に応じて教育を進める。日本は逆で、マスを育てる。今、国際的な貿易戦争などでイギリスは苦戦しているから、ドイツを見習え、アメリカ、日本を見習えという働きかけをしていますね。サッチャー政権の中で、文部大臣はしきりに教育改革を唱えている。ところが、そんなに簡単には変わりません。ただ、長い目で見ると、60年代にある学部が仮に30あったとすると、今は60に増えているとか、学位のインフレ現象なども見られます。

もうひとつは大学での教え方が基本的に違うんですね。イギリスとアメリカの大学を比較すると、イギリスは早くから専門教育を始めますし、リサーチの仕方も全然違います。アメリカの場合は、コースを取ってクレジットを集めていくのですが、イギリスのアンドラグランデュエートはどうですか。



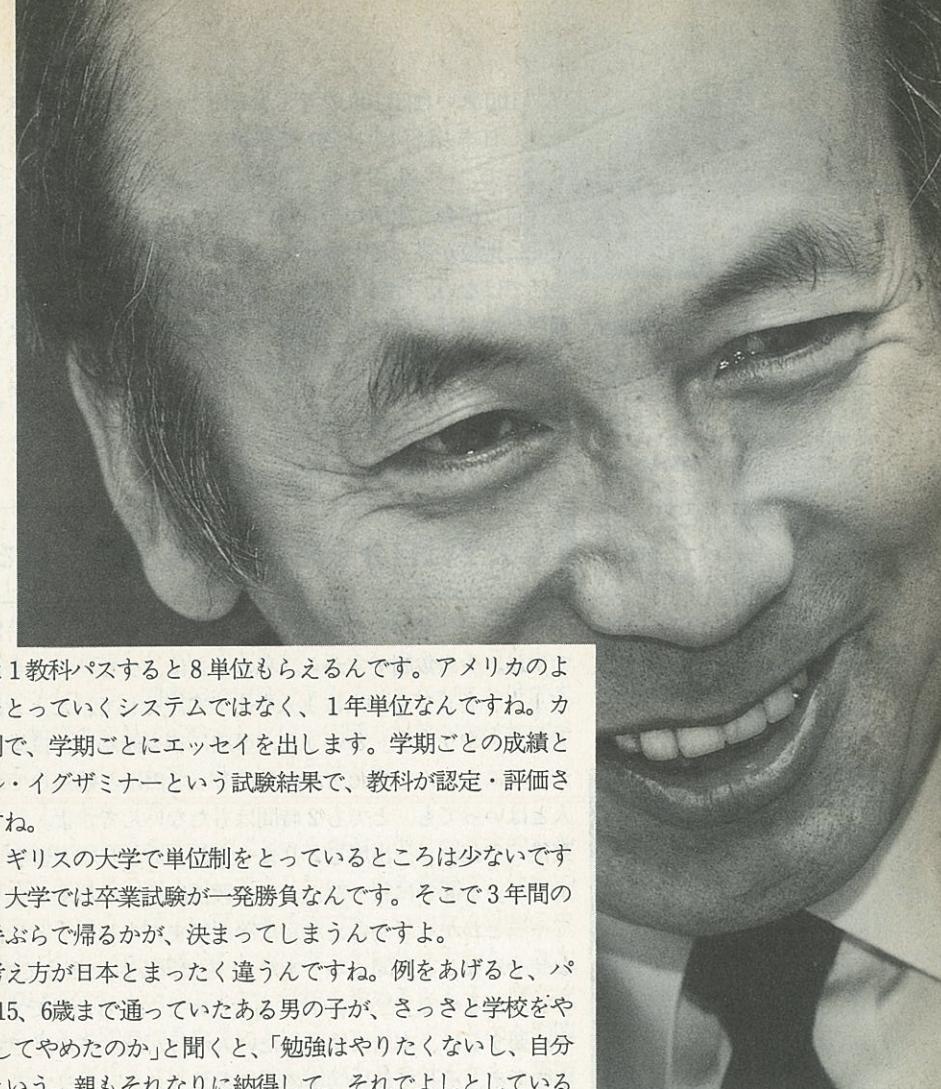
瀬戸 エセックスでは1教科パスすると8単位もらえるんです。アメリカのように学期ごとに単位をとっていくシステムではなく、1年単位なんですね。カリキュラムは3学期制で、学期ごとにエッセイを出します。学期ごとの成績と最後のエクスター・イグザミナーという試験結果で、教科が認定・評価されるシステムなんですね。

小澤 基本的には、イギリスの大学で単位制をとっているところは少ないですね。私のいたケント大学では卒業試験が一発勝負なんです。そこで3年間の苦労が報われるか、手ぶらで帰るかが、決まってしまうんですよ。

東後 教育に対する考え方方が日本とまったく違うんですね。例をあげると、パブリック・スクールに15、6歳まで通っていたある男の子が、さっさと学校をやめてしまった。「どうしてやめたのか」と聞くと、「勉強はやりたくないし、自分には向いていない」という。親もそれなりに納得して、それでよしとしているわけです。それから2週間たって近くのスーパーに行くと、彼がそこの魚屋さんで働いているんですね。魚をバーンと勢いよく切っている(笑)。こういうことにも象徴されるように、周囲からプレッシャーをかけて大学に行かせるのではなく、あくまでも自分の意志と適性で教育を受ける。ですから、日本人が留学するにしても、はっきりした目的意識がないと落ちこぼれますね。結局、誰も救ってはくれませんから。「あなたは何をやりたいんですか」というところからスタートしている。「何もやりたくありません。ただ、行きたいんです」(笑)。「じゃあ、帰りなさい」ですよ。

瀬戸 確かにそうですね。イギリスにいる時に、ケンブリッジを出た女性と話をしていた、僕は熱心に彼女の話を聞いていたんです。すると、いきなり「すべてに合意することはしないでしょ」といわれた。結局、意見が違うから議論があって、議論があるから建設的でありうるという考え方なんですね。ですから、イギリスの大学で教授の授業内容を右へ習えでレポートに書くと、容赦なく「落第」です。日本では文献を理解するだけで、ひとつの目的が達せられて、ワーワー！という感じですが(笑)。イギリスではここから議論が起こせなければ無能、ということになるんですね。あくまでも個人が尊重されるわけです。

東後 極端にいえば、日本は100人いれば80人が考えるコンセンサスがあるわけです。残りの20パーセントは、例外として考えられるんですね。イギリスで



## 東後 勝明

Katsushi Togo

早稲田大学教授  
「私は1969~70年、73~75年、86~88年の3回にわたって約5年間、ロンドン大学教育研究所に留学しました。1回めはディプロマ、2回めはM.A.、3回めはPh.D.に取り組んで、目下、Ph.D.の論文を執筆中です。イギリスでは、ディグリーワークのレベルが高くなるほど、自分がどんな目的をもっているのか、何をやりたいのかという強い問題意識が要求されます。Ph.D.のレベルではとくに、教授に教わるというよりはむしろ、その教授が学問上では敵のようになります。教授と対等にわたりえる能力が必要とされるわけです。ひとつのテーマについて、論理性の備わった議論が英語で、最低30分は展開できる能力が必要ですね」

# 小澤 恵子

Keiko Ozawa

ブリティッシュカウンシル 英国留学  
インフォメーションセンターヴィス部長  
「1975年に英語とはまったく関係なく、休養を兼ねてイギリスに行きました。ところが、会話ができないと買物もできない、食べたいものも食べられない。それで英語を始めました。英語は嫌いだったんですが、やり始める面白いんですね。語学学校をまわって、ケンブリッジの英語検定試験を全部終えて、最後にディプロマを受けたら、英文学を本格的にやりたくなりました。そこでケント大学に入学したんです。83年に卒業して、フランスをまわって帰国しました。帰国後は英語教師、通訳、翻訳などを手掛け、現在の仕事に就きました」

は、100人いれば100の考えがあるというところからスタートしている。

小澤 日本人は何か社会的基準がある、と思ってしまうんですね。「イギリス人にとって、いい生活というのは何ですか」という取材を受けたことがあるんです。自分に合う生活が一番いい生活じゃないんですか、と答えましたけど。社会的に地位が高くてお金があっても、家庭を犠牲にするようではちっともいい生活ではない。「憧れの職業」も、同じ理由からないんですよ。

瀬戸 結局は、価値観の問題ですね。日本で、たとえば東大、早慶を出るというパターンを想定すると、確かにイギリスでもパブリック・スクールを出て、オックスブリッジ（オックスフォード、ケンブリッジを称して、名門校の意味合いで使う）を出てというコースがあります。ただ、オックスブリッジを出たからどうのこうのという価値観はないですね。

## ●大学は自分を発見する場。知識を得る場ではない

小澤 イギリスが他の国と比べて恵まれているのは、手作り教育だということですね。少人数制ですから。私のときは、少ないセミナーだと学生4人に先生が1人、多くても10人に1人なんです。それで、たとえば英文学で「次は『リア王』をやります」というと、事前に本を読んで、授業ではすぐにディスカッションに入るんですね。だから前もって山ほど勉強しておかないと、いくら10人とはいっても、とても2時間はもたないんですよ。

東後 それから、出席もどりませんね。ある日本人留学生が「先生、出席りますか」と聞きに行ったら、その教授は意味がわからなくて、3回くらい聞いてやっとわかつてもらえたんだそうです。すると「とりません。でもあなたは、なぜそんなことを聞くのですか」と逆に聞かれたそうです。「自分は出られないこともあるので」というと、「あなたがミスするだけですよ」といわれたそうです。要するに、本当に勉強したい人だけが行ってるんですね。自分の考え方と先生の考え方、そして他の学生の考え方をエクスチェンジする。そうすることで、自分なりの独創的な考え方、ものの見方を展開していくわけです。知識を得なければ図書館にいきなさい、というんですね。

小澤 私が大学に入ってまず驚いたのは、フレッシュマンの手引きに、「レクチ

ヤーはあなたが必要でない、面白くないと思えば出席しなくていい」と書いてあったんですね。講義も、その教授が研究している革新的なものだったりして、刺激にはなりますが、今書いている論文の手助けにはならないんです。

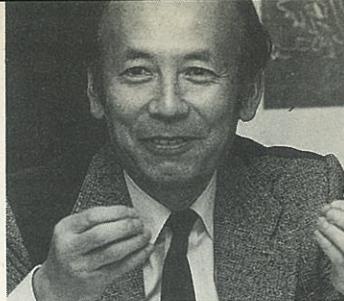
瀬戸 論文を書くのは、非常に大変な作業ですよね。ある問題に対してどう切るかというのが重要で、そのヒントがレクチャーの中にあると思うんです。レクチャーのトピックスについてクラスプレゼンテーションをやらされることもあるし、ディスカッションをすることもあります。だから、一番最初にレクチャーを受けないとどこに問題があるかわからないということにもなりかねないんです。学部によっても違うのでしょうか、僕は政治学でしたから。論文を書く場合、教授の意見のどこをつづくかということが、大きなポイントになるんです。それをずっと暖めておいて、図書館で実証できる情報をさがすわけです。

小澤 そうそう。でも、教授の意見に反論するには、完璧な材料がなければダメですよね。それも一種のチャレンジで、楽しいですけどね。

瀬戸 どう困らせてやろうかとか（笑）。

東後 “I want to be the master of myself.”というのが、彼らの基本的な考え方なんですね。自分が常に自分のマスターでありたい。ある意味で、他力本願では生き抜いていけないという、厳しい面があるんです。いったん社会の中で落ちこぼれると、日本の比じゃないほどみじめに落ちていきますから。日本では「みっともない」「家の恥だ」ということで、学校をやめるともう一度学校へ戻りなさい、会社をやめると職につきなさいというように、まわりの人間関係でがんじがらめですが、イギリスにはそういうものはありませんから。周囲からの要求がないんですね。講義に出なくともいいし、いやなら先生に会わなくてもすむ。だから、ずっと家で研究をしている人もいるんです。けれど、自由ということほどつらいことはない。すぐ自分を甘やかしますから。私も最初の6ヵ月くらいで、何をしていいのかわからなくなってしまいました。

瀬戸 それで、よくノイローゼになる人がいますね。数は少なくとも、自殺にまで追い込まれる人もいますから。イギリスの大学というのは、今まで話してきたように、専門教育をとても深く学んでいく。だから、プレステージも高い。そこに、日本のようにただ目的をもたずに進学する学生が入ってくると、大学側もプレステージを維持することに危機感をもつのではないしょうか。





小澤 そうですね。どの大学で学位をとっても、ポリテクニックで学位をとっても、最終的な学位のレベルは BA は BA、BSc は BSc で、レベルが一定なんです。学位そのものの質が、落ちていない。プレステージがあるんですね。最近では、ジュニア・イヤー・アブロードのような、1年間の学部留学をしたいという問い合わせも多くなっています。が、一番の問題は、やはり語学力。アメリカの大学では一般教養課程があるので、語学研修をやりながら、とそれなものからやっていける。そのかわり、4年間では卒業できませんけど。

イギリスの場合は、入学と同時に専門分野に入ってしまいますから、イギリス人同様、大人として扱われるんですね。それが礼儀であるとポジティブに受けとめるか、暖かみがないと解釈するかは受け取り方次第です。

東後 大学側もアカデミック・スタンダードを保とうという努力はしています。エクスターナル・イグザミナーというシステムがあって、採点に自分の大学の教授プラス、他の大学の教授を登用して、スタンダードを保持するとか。ただ、時の推移とともに、少しずつ変わってきてているのは確かだと思います。

瀬戸 ワーキングクラスの人でも、優秀な人間を育成しようという考えが起きてきたんですね。今ではワーキングクラスの人でも、日本のように中流意識をもってきている。中流といわれる地位に、社会的にも経済的にもなってきているという背景があるから、教育もその変化に合わせてきているんですね。

東後 学生の数も増えましたからね。つまり、お金がかかるんです。ところが今の保守党的な政策では、予算の削減でお金がない。そうすると従来の先生と生徒の比率条件が悪くなる。スタッフを雇えないから、ライブラリーなどの運営の効率が悪くなる。だから、財源を確保するために、留学生を多く取らざるを得ないというのが現状だと思うんです。お金が払えて、問題も起こさない、そして成績は優秀である、ということで日本人留学生は歓迎されています。我々から見れば、チャンスですよ。

### ◎世界中の英語を知ることが語学留学の醍醐味

小澤 私は、高校時代、本当に英語ができなかったんです。イギリスに行って、本当に何もわからなかったから、言われることをうのみにするしかなかった。



必死になって知っている単語を並べる。ある先生から、とんでもない誉め方をされたんですよ。「日本人にしては間違いをおそれずに喋りますね」と(笑)。

瀬戸 私は高校時代にテキサスにいたので、イギリスに行った当初は「ずいぶん気取った喋り方をするな」と思ったんです。でも、慣れてみると、イギリス英語のほうがとても素直な音なんですね。講義をきいていて知らない単語が出てきても、スペルがぱッとわかる。発音のことをいえば、日本人は日本人の英語であればいいと、私は思います。アメリカにいた時のことですが、「ショーグン」というTVドラマで、島田陽子さんが使っていた英語がとても評判が良かったんですね。魅力的だと。アメリカの音でもイギリスの音でもない。気にせずに、きちんと通じる英語を話すことが大切だと思いますよ。

東後 文型がしっかりとしていて、ボキャブラリーが正しければ、発音が多少違っても通じますからね。

瀬戸 海外での語学研修のメリットは何かというと、イギリス英語を学びに行っても、イギリス人は語学学校にはいない。先生だけですよね。その代わり、いろいろな国の人たちが来ているから、いろんな発音に慣れるんです。自分の英語は世界各国に通じるんだ、という自信がつくわけです。

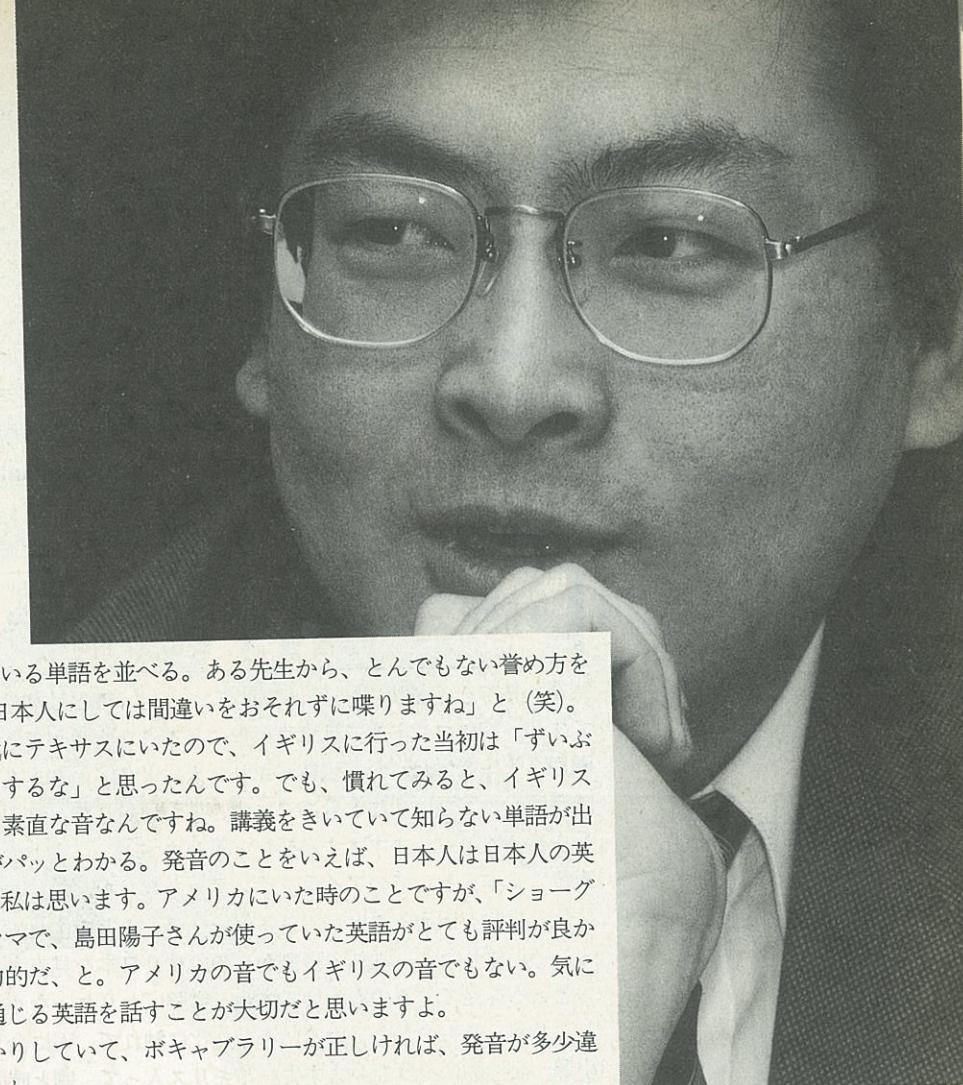
小澤 何かほかのことをしながら英語も学びたいという問い合わせが多いのですが、非常に難しいと思います。イギリスに職業教育を受けに行くには、その態勢が整っていないければ無理なんです。並行してやるのはひじょうに難しい。ある程度、準備をしてから行ったほうが効率もいいし、自分もエンジョイできるんです。遠回りに見えますが、ずっと効果的だと思いますね。

瀬戸 英語もわからない、専門分野も一からやるというようでは、どちらにも重きが置けませんからね。

東後 結局、最後には目的意識の問題になってしまうんですね。

小澤 英語の問題がまったくないイギリス人ですら、大学に入れない人がたくさんいるのですからね。そのかわり、準備は大変だけど、ああいう手作り教育が受けられるところは、世界の中でもほとんどない。そういう意味では、苦労のしがいは絶対にあると思います。準備をした分だけ吸収できるというか。

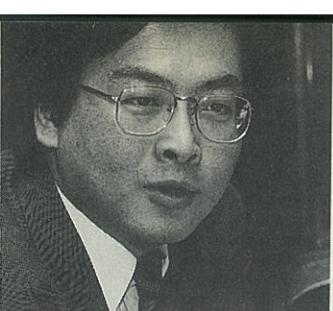
瀬戸 マスプロで「はい、来なさい、入ったから出させてあげますよ」という教育をイギリスがしているのなら、私自身、イギリスに留学したことでの



## 瀬戸 健一郎

Kenichiro Seto

日本政治総合研究所勤務  
「高校時代にアメリカに YFU で留学したんですが、その時がレーガン、カーターの大統領選挙の時期で、政治に非常に興味をもったんです。それから母校の獨協大学がエセックス大学と交流を結び、第1期交換留学生としてイギリスに留学するチャンスを得たわけです。本當はアメリカに戻って MA でもやろうかと思っていたんですね。政治を勉強するにあたってイギリス留学を考えなかつたのもおかしくらいですが、閉鎖的なイメージが強かったんです。この交換留学制度では前後の継続履習を認めてくれたので、4年間で大学を卒業することができました。アメリカ留学だったら、これほどまくはいかなかったと思いますね」



ほどの満足感は得られなかったと思います。ひとことでいえば、それがイギリス留学のメリットではないでしょうか。

東後 常に自分自身でいられる。そのためには、自分で考え、判断を下し、行動を起こし、責任をとる。“academic maturity(学問的成熟度)”ということがありますが、イギリスの大学では、本当にこの“maturity”的度合が高いですね。要するにイギリスの大学は、実質があるんです。それを吸収できるだけの語学力と目的意識、プラス強い意志と熱意がないと続きませんね。

### ◎留学を成功させる秘訣は、柔軟性をもつこと

東後 日本をイギリスへ持っていくな、ということはぜひともいっておきたいですね。特にロンドンでは東京以上に日本の生活ができますから。

瀬戸 そうですね。ただ現在イギリス人にとって、日本人というのは非常に興味深いものだということもあります。彼らに対して、日本のインフォメーションを与えるのも、ますます必要だと思います。

東後 日本人としてのアイデンティティをもちながら、どれだけ正しく日本の文化と事物を伝えることができるか、ということですね。それから、難しいこともいいましたが、地球の裏側からのんびり日本を見直すとか、日本にないいいところを見てくるのも大切ですね。勉強ばかりじゃなくて、考え方やフレキシビリティをもつこと。いろいろな文化に触れて、人に会う。

小澤 必然的にそうなりますよ。イギリス人って、割と時間の使い方が上手だから、勉強する時は必死になってやる。ところが、週末には必ずどこかでパーティをやってたりするでしょ。

瀬戸 イギリス人がすごいのは、パーティで騒いだあと、帰って寮で勉強するんですね。

東後 ソーシャル・ライフも、アカデミック・ライフと同じくらい大切ですね。

小澤 ハードだ、ハードだといいますけれど、充実しているんですよ。

東後 そこでエンジョイという言葉が、出てくるんですね。

小澤 日本だと単位が決まっていて、ああ、もっとやりたいのにと思ってもできない。それに比べて納得いくまでやれる、という満足感があるんですね。



# イギリス留学 ひとりごと実現

